

著者にインタビュー



中ソ対立と現代

(中央公論社・一七〇〇円)

中嶋 嶺雄

■本格的な歴史研究書

ヤルタ体制形成期から中ソ破局にいたる中ソ一枚岩といわれた時代を検証、再構成している本格的な歴史研究書。戦後アジア史の真相に迫る。

中央公論社で刊行している『叢書・国際環境』の一冊。

■常識への疑問

Q 執筆の契機、目的は？

A 中ソ関係を研究しておりまして、これまで世界史の教科書で書かれていたような常識が、果たして正しいかどうかを検証しようということですね。たとえば、中ソ友好同盟条約は、どの教科書でも、中ソの友好と団結のシンボルとしてかかげられていたんです

けれども、実はそうではなかったのではないかとということが、段々とわかってきましたからね。

そして、一九七〇年代に入ってから、アメリカの外交文書が解禁されてきたということ。それから、中国やソ連も、中ソ論争や文化大革命を通じて、その内部に閉ざされていた姿のベールを徐々にほぐることができるようになってきた。

こういう状況があり、今まで、中ソ一枚岩的な団結の時代についてのまとまった著作がなかったわけです。そういうことで、戦後のアジア史を再構成、再検討してみたいと

本の紹介

社会主義と自由

関 嘉彦著

(民社研刊・一三〇〇円)

自由の価値と限界にふれ、自由を支える道徳哲学の必要性などを指摘しており、さらに、J・S・ミルの自由論の重要性を力説し、その現代の意義を明らかにしている。

今、共産主義者の間で、われわれが現在享受している自由と民主主義を積極的に擁護せざるをえない動きが世界的に活発化している。日本共産党もまた、その時流にのろうとしているようだ。それらの評価については、さまざまな意見があるが、民主社会主義者の立場から共産主義者のこうした動きを理論的にどうとらえるべきであろうか。

この問いに答えるためには、まず、民主社会主義の歴史と理論を正しく学ばねばならないし、また、自由とは何かを改めて問い直す必要に迫られるであろう。

本書の第一部では、民主社会主義の歴史と理論およびヨーロッパ社会主義運動の発展という二つの論文が収められている。第二部では、まず

という、ある種の使命感みたいなものにかりたてられ、また、ぼく自身も、このへんで長年の研究をまとめてみたいと強く思いましたね。

■歴史の文脈を見ぬく

Q 読者への注文は？

A 中ソ対立は、現代史で、まさにもつともダイナミックなドラマであったと思うんです。それを、とらわれのない見方で、全体的につかんでほしいということですね。

しばしば、真実から非常に離れた虚構が、イデオロギー的な裏づけをもって主張されたり、政治的な配慮によって主張されたりして、いつのまにか虚構が真実になってしまっていることがある。結局、人類の悲劇は、そういうところからできています。やはり現代史というのは、歴史の行き違

いみたいなものですからね。ですから、もしも、あの時に、こうしていたらという単なる後知恵としてはなくて、歴史の文脈に根づいた選択というものがありうるわけですから、そういうものを発見してゆくことが必要なわけです。そして、できるだけ行き違いをなくする。これは特に政治の課題でもありますが。

そういう意味で、戦後史が遠い過去になってきつつある今日、やはり、若い世代の人達におおいに読んでいただきたいと思えます。

(構成・原)

ななじまみねお
昭和11年生まれ。東京外語大卒。著書は『現代中国論』『中国文化大革命』『逆説のアジア』『日本外交の選択』など多数。現在、東京外語大教授。

とめられている。本書は、民主社会主義者の貴重な座右の書となろう。

(安達裕志)

◇ 福祉社会の基礎講座

菊池幸子著

(著士社会教育センター刊・五〇〇円)

福祉政策が重要な課題となつてから久しい時間がたっているが、果たして現在の日本人は、快適な生活環境を享受しているだろうか。たしかに社会保障などの一面では、いちじるしい改善や進歩のあとがみられ、隔世の感のあることは事実である。

しかし、現実には、広義の福祉と狭義の社会保障を取り違えて、ほどこしの「バラマキ福祉」を行なつて批判されたり、経済の低成長にもなう財政難から施策を後退させたりしている。

これは、福祉に対する確固たる哲学や思想が確立されていないせいだと考えられる。

著者は、「真の福祉社会とは、生活

の水滸と質とが一致し、すべての人がびとが恵まれた生活環境のなかで、満足できるだけの所得を得、各個人が自由意志によって、自己実現の道を選択し、それに向かって努力することに生きがいを感じている社会であらう」という基本認識をもって、「福祉国家」を越えて人間が真の幸福と生きがいを追求できる福祉社会へ至る諸前提を分析している。

本書は、福祉社会のモデルはあるか、福祉社会の構成要素、生活と自由時間、生涯教育の実現、福祉社会の福祉政策、コミュニティと住民参加の六章からなり、福祉にかかわる社会保障、生活の水滸・質、教育、自由時間の活用、地域社会と参加などの諸問題を、外国の特にスウェーデンの事例に照らして詳細に説き明かしており、福祉を實踐してゆくわれわれにとって一読したる力作。

なお、同センターから出版されている「労働者教育と産業民主主義」(菊池幸子・丸尾直美監修)もあわせて読まれることをおすすめする。

(升田孝二)